

# ウィリアム・T・ハリスの幼児教育思想 —アメリカ幼稚園運動における幼小接続の原点—

山本孝司\*

**要旨：**本稿で取り上げるウィリアム・T・ハリス (William Torrey Harris, 1835-1909) は、アメリカ教育史の中で優れた教育行政官として位置づけられてきた。彼は哲学者でもあり、セントルイス・ヘーゲル運動の中心人物であった。本稿では、ハリスによる進歩主義教育への影響を幼児教育に焦点化して考察することで、彼の教育思想のもつ「架け橋」的性格としての意義を描出することを試みた。彼の幼児教育思想は、幼稚園と小学校カリキュラムの接続という観点から、幼稚園のサブ・プライマリー化の出発点となったこと、小学校教育の準備教育として、旧来のフレーベル主義に基づく幼稚園教育に改良を促したことという二つの点で、進歩主義幼稚園のプロトタイプを提示したという意味合いにおいて、より積極的な評価を与えることができる。

**キーワード：**ウィリアム・T・ハリス、アメリカ幼稚園運動、進歩主義教育、フレーベル主義、幼小接続

## I. はじめに

### 1. 問題の所在

アメリカ幼稚園運動は、1850年代末から1920年代にかけてのドイツからのアメリカへの幼稚園の移入と展開を指す。幼稚園がアメリカに定着する過程で、幼稚園カリキュラムが開発されるとともに、1920年代には、小学校との接続カリキュラムが、シカゴ大学のテンプル (Alice Temple, 1871-1946) やコロンビア大学のヒル (Patty Smith Hill, 1868-1946) によって考案され、幼小接続期における子どもの経験の連続性に配慮した実践理論構築が模索された。制度的にみたときにアメリカ幼稚園運動において幼稚園と小学校の接続がはじめて実現したのが1873年のセントルイス公立学校幼稚園であり、この設置に尽力したのが本稿で取り上げるウィリアム・T・ハリス (William Torrey Harris, 1835-1909) である。

ハリスは、アメリカ教育史の中で優れた教育行政官として位置づけられてきた。彼の教育行政官としてのキャリアに関しては、セントルイス市教育長を1868年から1880年13年間、アメリカ連邦教育局長官として1889年から1906年までの17年間務め、その間に市レベルから国家 (連邦) レベルまで様々

な教育改革に着手し、成功をおさめている。また、彼には哲学者の顔もあり、セントルイス・ヘーゲル運動の中心人物であった。

ハリスはアメリカ哲学史的には、エマソン (Ralph Waldo Emerson, 1803-1882) らニューイングランド超越主義 (Transcendentalism in New England) とデューイ (John Dewey, 1859-1952) らプラグマティズム (Pragmatism) の間、アメリカ教育思想史的には、超越主義を背景にしたオルコット (Amos Bronson Alcott, 1799-1888) やピーボディ (Elizabeth Palmer Peabody, 1804-1894) の教育思想とデューイの教育思想の間に位置している。後者に関して幼児教育に限定してみると、ハリスは、幼児学校を支えてきたペスタロッチ主義から幼稚園導入期のフレーベル主義への移行期にあり、19世紀末のプラグマティズムを基調とする進歩主義教育によって批判的に克服される対象となっている。

このように哲学史的にも教育 (思想) 史的にも「ターニングポイント」という意味で重要な位置にいるハリスであるが、教育行政官の功績以外で研究対象として取り上げられることは稀である。そこで本稿では、教育行政官としての功績に関連させながらも、ハリスによる進歩主義教育への影響を、幼児

\* 岡山県立大学 保健福祉学部

〒719-1197 岡山県総社市窪木111

教育に焦点化して考察することで、彼の教育思想のもつ「架け橋」的性格としての意義を描出することを試みたい。

## 2. 先行研究および本考察の視点

主題に関連して、アメリカ教育史研究ではハリスの名前は必ず登場する。その場合、ホーレス・マン(Horace Mann, 1796-1859)やヘンリー・バーナード(Henry Barnard, 1811-1900)に続く、コモンスクール運動第二世代として「公教育の育成者」として彼は紹介される<sup>1</sup>。

しかし、ハリスを主題とする先行研究自体は少なく、さらにハリスの幼稚園教育への貢献について主題とする論考となると僅少である。本国アメリカにおいては、ライデッカーによる伝記的研究“Yankee Teacher: The Life of William Torrey Harris”が代表としてあげられ、ハリスの生涯にわたる思索と活動について扱っている<sup>2</sup>。ハリスの教育史における重要性については、「アメリカの最初の偉大な教育哲学者」(America's first great educational philosopher)<sup>3</sup>という異名と次のコメントに要約される。

日本においては、管見の限り、青木薫が教育経営の観点からハリスの思想を取り上げた『ウィリアム・T・ハリスの教育経営に関する研究』のみである<sup>4</sup>。この研究の中で青木は、「第二章 ハリスによる教育経営の実践」で一項分を割いてハリスの幼児教育へのかかわりについて論じ、「ハリスはコモンスクールの教育、学級経営、学校経営がよりよく行われるためにこの幼稚園での教育を考えた。しかも、学校経営をよりよくするためにコモンスクールの教育に限定することなく、コモンスクールへの就学前の教育を考えていたところにハリスが教育経営者として高く評価され、幼児教育はセントルイス市における教育経営の形成に大きな意義を有していたことを認めることができる」<sup>5</sup>と指摘している(青木氏は「教育経営」という語句を用いているが、本書で描かれているのは教育行政官としてのハリスの実践についてである)。

こうした教育行政官、教育哲学者としてのハリスに対する高評価にもかかわらず、進歩主義教育に関する研究の視点からは、ハリスはそれらが克服しようとした学校の性格を用意した、いわば敵役として位置づけられ、相対的に彼に対する評価は低くな

る傾向にある<sup>6</sup>。幼稚園教育との関連でみたときには、ハリスが公立学校幼稚園をともに創設したブロウ(Susan Elizabeth Blow, 1843-1916)も、フレーベル主義保守派の代表として、進歩主義幼稚園教育家たちからの批判を受けた後に、結果的にフレーベル主義は進歩主義に取って代われ、ここでも間接的にハリスの功績に対する評価が霞むことになっている<sup>7</sup>。

本稿では、こうした研究動向を踏まえ、卓越した行政手腕をもった教育長としてのハリス、進歩主義教育思想に克服されたハリスという、アメリカ教育思想史で描かれてきた二つの人物像とは異なるハリス像を提示することを目的としている。そのためにこれまで主題として扱われてこなかった幼稚園教育運動の中でのハリスの教育思想の評価を行うとともに、彼の幼小接続の実践理論をフレーベル主義と進歩主義とを繋ぐ通路として位置づけることを試みる。その際の手がかりとして本稿では、ハリスと幼稚園教育とを結び付ける資料として、セントルイス教育長時代の教育年報および、進歩主義教育の理論的背景にある新心理学と児童研究運動への対抗の書として彼が世に出した『教育の心理学的基礎』を資料とし、彼の幼児教育思想を抽出し評価する(なお、特に断りを入れない限り、訳出は筆者による)。

## II. ハリスによる幼稚園の位置づけ

### 1. 公立学校幼稚園の設立

イエール大学を中退後にハリスは、セントルイスでしばらく学校教師を務めた後、1867年にセントルイス教育委員会教育長デイヴォル(Ira Divoll)の要請により教育次長のポストに就く。そして翌年の1868年には教育長になり1880年までの13年間この職務に当たった。セントルイス教育長時代に数々の教育改革にハリスは取り組んだが、その中で幼稚園教育における彼の功績は、ミズーリ州セントルイスにおいて、当時教育長の立場で公立学校幼稚園を設置したことである。

1873年にハリスは、フレーベル主義の幼稚園教師ブロウ(Susan Elizabeth Blow, 1843-1916)とともにデスペレス公立学校幼稚園(the Des Peres kindergarten)を立ち上げた。

1870年代当時のアメリカ各所では、初等教育以前は、家庭と教会が道徳的訓練等、子どもたちの教育の基礎を提供していた。南北戦争後の、中産階級以

上の家庭における教育に機能の低下と移民の貧困家庭における家庭教育の機能不全によって、就学前において家庭以外に教育の場が必要となっていた。ハリスの幼稚園への関心は、こうした当時のセントルイス市における未就学児のおかれた状況に関係していた。彼は教育長就任の前年度の年報ですでに次のように幼稚園教育の意義について述べていた。「『小さな子どものための仕事場』(Kleinkinderbew ahranstalten) は、そのような機関がほとんど発達していない国にとっては、その教育システムの真の基礎となるであろう。幼児はそこではアルファベットを学ぶことはなく、絵本や幼児に理解できるもの以外には、いかなる書物も用いられない。しかし、彼は考えることを好むようになり、悪徳の影響や粗暴さ、不正確な言語から引き離され、言葉を正しく用いるようになる。このようにして、彼らは完全に精神的な準備ができてから、小学校に入学することとなる」<sup>8</sup>。

1868年にハリスが教育長に就任すると、教育的ニーズについて評価するための材料として、セントルイス地区の調査を指示している。その中で、セントルイスの学童のクラス、民族、および出席年齢を基本データに子どもたちの生活実態について分析した。この調査では総じて、公教育における驚くべき不平等が示され、工場・港湾堤防地区の教育的欠陥が浮き彫りにされた。「製造工業地区での子どもの学校生活の平均年数は、全部で3年間である。7歳で入学し、10歳で学校教育を終える。もし仮に彼が5歳で学校に入り適切な世話をされるならば、彼の学校生活は5年間続くだろう。この期間は彼の生活に永続的な印象を与えるのに十分な期間となる。私が先の報告で暗示した7歳以下の生徒の排除はいぜんとして続いているが、以前ほどではなくなっている。その影響が子どもを墮落させてしまっているセントルイス市の特定の地区では、子どもは路上で遊ぶことを余儀なくされているため、より早く彼らを学校に行かせる方が絶対に良い。幼児のための幼稚園の教育システムは、幅広く教育者の大きな関心を引きつけている。そこで、われわれは、この幼稚園システムから小学校の最低段階の教育方法に関する貴重なヒントを探さなければならない」<sup>9</sup>。ハリスは「非常に貧困家庭で、子どもが路上における邪悪な関係により、犯罪へと導かれる。彼が小学校に入学するまでに、学校の力によっては断つことができ

ないような邪悪な習慣を身に付けてしまっている」<sup>10</sup>と述べ、特にスラム街の子どもどもたちの学校からの早期退学していること、彼らの多くが路上で悪習慣を幼いうちに身に付けていることを特に懸念していた。ハリスは、セントルイスにおける教育機会の不平等の現状が、将来的に市民社会の秩序に脅威を与えると考えた。調査を受けてハリスは、小学校の就学年齢を6歳以下に引き下げる提案を議会で行った。

## 2. 幼稚園教育に対するハリスの立場

### (1) コース・オブ・スタディの構成要素としての「魂の五つの窓」

ハリスにとって学校教育は、社会問題解決の手段としての意味合いが強く、彼が教育長在任中のセントルイスでは南北戦争後に深刻化した失業者の増加と貧困の増大への対応が喫緊の課題となっていた。こうした問題への対応は公教育によってのみとの信念をハリスは持っていた。彼によると教育の目的は、自由、自立、自己活動、および「方向性をもった能力」(directive faculty)であった。彼は、良き習慣や規律を身に付けることで、自由、自立が獲得され、方向性をもった能力による自己活動が可能となると考えていた。その際の鍵概念は、彼が自身の教育理論の基盤に据えていたヘーゲルの「自己疎外」(Entfremdung seiner selbst) の概念であった<sup>11</sup>。ハリスは「自己疎外の過程とその流れ」が全ての教育に関わるとした上で、「彼が彼の自己疎外を通じて存在している時、彼は彼の直接の感情と衝突を客観化する力を得る。そして彼自身にとってそれ以前は曖昧であった事柄を理解できるようになる」<sup>12</sup>と説明している。個人の人生は、自己意識が種々の経験を通して、自己を精神として自覚してゆく過程であり、その際に直接的な自己確信を否定する他なる存在との関係のうちに自己を確証していくという精神の現象として顕現する。

他方で彼には学問的教科に基づく教養教育を目指す伝統主義的傾向があった。ハリスにとって、子どもたちが自発的に行う偶然的な学びではなく、「人間は、感覚に囚われた外的な世界から注意を逸らして、エネルギー、力、決定的な原因、原理に注意を向ける能力によって、自らを動物より上の地位に引き上げているのである。人間は特殊なものから一般的なものを見ることができ。……人間は、原因の

中に、その必然としての結果を見通すことができる」<sup>13</sup>と述べ、教育においては、子どもたちの動物と共有される感覚・知覚よりも、論理的な思考や抽象的な思考をすることに重きを置いていた。ハリスの「自己疎外」という考え方および伝統主義的傾向の教育理論へ具体的な援用は彼の「魂の五つの窓」(five Windows to the Soul)として結実した。ハリスは、「学校教育の第一段階は文化のための教育であり、知性の慣習を掌握するための教育である。これらの慣習とは、読み書き、図形の使用、地図の技術、辞書、描画技術、および子供が人類の知的成果にアクセスできるようにするすべての自動的機能に関わる技術である」<sup>14</sup>としつつ、「魂の五つの窓」について次のようにまとめている。

魂には5つの窓があり、人間の生活の5つの区分に開いている。そのうちの2つは、時間と空間の領域である自然に対する人間の理解と成果に関連しており、算術は、時間の形をもつものすべての概観を提供する。個々のすべての系列と連続、すべての量的多様性は、計算の技術の助けによって習得される。魂の地理的な窓を通して、調査は有機的および無機的な自然にまで及ぶ。すなわち、地球の表面、居住地としての人間とその食物、衣服、住居の生産者としての人間の具体的な関係、そして人間の切り離された断片を1つの壮大な人間に結合する相互作用の手段等である。これらすべての重要な事柄が導入される。地理の勉強を通して生徒を育てることは、魂の第二の窓の前に私たちのパノラマを広げてくれる。人間生活の他の3つの部門または区分が、さらに眼前に横たわっている。人間の生活は、人々の市民的、社会的、宗教的な歴史の中で明らかにされている。小学校での自国の歴史の学習は、自国の意志力の光景を見渡す魂の窓を開く。人々の言語では、語彙、文法法則、または構文に現れるように、その知性の構造的枠組みの内部論理法則と人類の心の意識の実現が明らかになる。文法は子どもに人類の精神の内部の働きに対する彼の見方を開き、彼自身の精神的な自己を理解するのに大いに役立つ。最後に、文学は最もアクセスしやすく、人々の感情、意見、信念、相続人の理想、切望、願望を最も完全かつ完璧に表現するものである。魂の第5の窓は、文学を通してこの人間性の

啓示を見る。文学の学習は、子どもの最初の読み手から始まり、高等な読み手の詩人や散文作家からの選択によって、感じた人生の最高の瞬間の最高で最も幸せな表現を学ぶまで、学校の授業を通して続く。天才たちによって最初に記述され、すべての仲間に豊かな遺産として残し、彼らのようには才能のない同胞たちは、彼らの共通の母国語の助けを借りて、彼らの洞察を楽しむことに参加することができる<sup>15</sup>。

こうした「魂の五つ窓」を反映する形で、小学校以降の教育課程が次のように構成される。すなわち、「第1は数学と物理学、第2は主に植物と動物を含む生物学、第3は文学と芸術、第4は文法と言語の技術的および科学的学習であり、それが論理学や心理学等を含む。第5に、歴史と社会学的、政治的、社会的制度の学習」<sup>16</sup>である。

## (2) コース・オブ・スタディへの幼稚園の接続

ハリスは、フレーベルの恩物やオキュペーションを評価しつつ、遊びやゲームをより重視していた。ハリスは遊びとゲームを評価した点について次のように説明している。「幼稚園は、それが恩物やオキュペーションを教えている時、本領を発揮する。なぜならば幼稚園は、手段と道具の世界を扱うことによって、子どもが自然を征服するのを助けているからである。遊びとゲームによって幼稚園はより良く役に立っている。なぜならば、それらはその本質において完全に人間的であり、それらが子どもたちに生活の問題を解決する上で人類の最初の経験のあり方を象徴的な形で与えてくれるからである。それらは子どもたちを知恵にうぬぼれさせることなく賢くする」<sup>17</sup>。

ただし、ハリスによるフレーベル評は、「教育改革者として宗教的（または道徳的）な愛好家」であり、幼稚園はアメリカの教育にとって重要ではあるものの、それは限定的に用いられるべきであると彼は考えていた。ハリスは「遊びによる教育は子どもがすべてを軽蔑的に取り扱うことを学ぶという悪い結果をもたらす」というヘーゲルの考えを支持し、フレーベルの遊び重視の思想に完全には同調しなかったからである。ハリスの遊びの評価は、次の彼の発言に示されるように、「自己疎外」の思想が基盤となり、小学校の教育課程における学習の準備と

して有効な限りにおいて意義が認められた。彼は言う。「個々の子どもは、遊びやゲームに参加し、すべての生徒と教師が参加する、自然の世界から人間の世界へ、物の世界から自己活動の世界へ、物質的で地球的なものから精神的なものへと上昇する。恩物やオキュペーションにおいて、彼は自分の意志を物質に対する力として意識し、それを変換して使用し、それを彼の理想の象徴にする。しかし、そのような活動では、彼は自分の精神的な感覚を完全には理解していない。なぜなら、彼はその中に自分の特定の自己と一般的な自己との違いを認識させるものを何も見つけられないからである。遊びやゲームの中で、彼は自分の社会的自己を意識するようになり、特定の個人の特別な自己に対抗して、制度で実現される自己のより高い理想が明かされる」<sup>18</sup>。

### Ⅲ. フレーベル主義幼稚園と進歩主義幼稚園の間

#### 1. サブ・プライマリー化の原点としてのセントルイス公立学校幼稚園

セントルイスでは当初、幼稚園を公費で賄うことに対して市民から反対もあがった。それに対して、ハリスは、「裕福な家庭においては、この時期の子どもの世話は、指導上のスキルとともに全般的に意志の能力も欠いている召使に任せるのが慣例となっている。……幼稚園によって、家庭での貧弱な管理から生じる甘やかし、墮落による破滅から救われるだろう。……したがって、どちらの階級が幼稚園からより多くの恩恵を受けるかどうかについて述べることは難しい」<sup>19</sup>と述べ、貧困家庭のみならず裕福な家庭にとっての幼稚園教育のメリットも説いている。

公立幼稚園の成果に関してハリスは、1877年の教育年報で、「幼稚園から来た子どもたちは、自助能力、成熟度、感覚知覚の素早さ、思考の把握において、他の子どもたちよりも優れていることがわかっている」<sup>20</sup>と述べ、小学校との円滑な接続状況について報告している。こうした報告を通して、幼稚園の重要性はセントルイス市民の理解を得て、同市内に1879年までに27の幼稚園が設置された。1880年代にはまたミズーリ州を超えて、全米で幼稚園の学校制度への編入が進んだ。セントルイスの成功にいち早く反応したのはウィスコンシン州で、同州ではアメリカへのドイツからの幼稚園導入の先覚者シュルツ夫人 (Mrs. Kahl Shurtz) ゆかりの州でもあ

り、幼稚園教育に対する関心が高かった。同州ミルウォーキーの教育長マカリスターは、セントルイスの公立幼稚園を視察し、1882年にミルウォーキーに公立幼稚園を設置している<sup>21</sup>。その他、特に東部において、博愛主義の事業としてはじめられていた私立の幼稚園が公教育制度に取り込まれる形で公立化していった。上野によると、1890年代には公立幼稚園15,145名に対し私立幼稚園は16,082名になり、その後も公立幼稚園在籍者は増えていったとされる<sup>22</sup>。

こうして公立学校幼稚園として、小学校に幼稚園が公教育として接続されることになったが、1900年代にはフレーベル主義幼稚園を母体としながらも、公立学校幼稚園は、プライマリー・スクール (Primary School) へと続くサブ・プライマリー (sub-primary) としての性格を強めていくことになる。この幼稚園のサブ・プライマリー化を牽引したのはデューイをはじめとする進歩主義教育家たちであったが、ハリスの公立学校幼稚園が、小学校の就学年齢の引き下げの代用としての小学校への準備教育であったことを考慮するならば、アメリカで主流となった公立学校幼稚園において、幼稚園の独自性よりも、小学校カリキュラムとの接続が重視されるようになったことは必然ともいえる。

#### 2. 進歩主義幼稚園の台頭

1890年代になると、プロウらによってアメリカにおいて展開してきたフレーベル主義幼稚園に対する批判が起こってくる。それは幼稚園外部からというよりも、幼稚園内部からであった。1890年の全米教育協会 (National Education Association) の幼稚園部会での演説でアンナ・ブライアン (Anna E. Bryan) が講演「文字は人を殺す」(The Letter Killeth) の中で、象徴主義に基づく恩物の形式的な使用と教材の形式的な配列による子どもの遊びに自己決定の要素が欠けていることを批判したことがフレーベル主義批判の皮切りとなった<sup>23</sup>。

こうした批判の背景には、ホール (Granville Stanley Hall) の児童研究運動やソーンダイク (Edward L. Thorndike) の新心理学の影響があった。両者の科学的知見を受ける形で、幼稚園教育家たちの間に、自らの教育実践を科学的に検証していかこうとする姿勢が生まれた。ブライアンを皮切りに展開するフレーベル主義幼稚園教育批判もこうした科学的志向性と結びつくこととなる。



(Psychologic Foundation of Education) を発表する<sup>29</sup>。この著作は、当時のホールの児童研究運動やソーンダイクの新心理学に対抗して著された研究であった。内容は、ヘーゲルとローゼンクランツ (J. K. F. Rosenkranz) の機能心理学に依拠したものであった。後者に関しては、1899年にハリスの編集で『思弁哲学雑誌』に寄稿された論文をまとめる形で『教育哲学』(The philosophy of education) を出版している<sup>30</sup>。

ハリスは、児童研究を「心の事実の目録」を提供することを目的とした経験的または生理学的心理学の一分野に過ぎないとして批判した。対照的に、彼にとって合理主義心理学は「精神生活の前提」となる研究であり、「精神的プロセスの一般的な形態についての考察」であった。児童研究は、教育における内省の役割を無視していることで、基本的な思考形態を説明するのに役立つかもしれないが、より高い形態の合理性を理解するのに役に立たないと彼は主張した。「内省は内部観察であり、心自体の活動に対する私たちの意識である」とするハリスにとって、児童研究の質問紙法には欠陥があった。加えて、ホールの児童研究における教育へのアプローチは、教育の基本的な目的が視野に入っておらず、児童研究の方法は最終的に幼稚園だけでなくアメリカの教育全体に害を及ぼすとハリスは考えた<sup>31</sup>。

『教育の心理学的基盤』の副題は、「心の高次の能力の起源を示す試み」(an attempt to show the genesis of the higher faculties of the mind) となっている。ハリスはこの中で、内省による自己意識の自己活動について論じている。人間の成長を、「自己疎外」を前提とする自己活動を通じた絶対精神への発展と捉えるハリスにあっては、教育の心理学においても自己から出発し、社会制度の理解による他なるものとの共生に至る過程として説明される。

## V. 結論

進歩主義幼稚園が理論的支柱とした児童研究および新心理学と彼のヘーゲル精神現象学やローゼンクランツの機能心理学とは相容れることはなかった。ヘーゲル哲学を基盤とする機能心理学による巻き返しを図るというハリスの試みもむなしく、心理学の流れはソーンダイクから新心理学の方に向かった<sup>32</sup>。

しかし、セントルイスにおける公立学校幼稚園設立とともに形成されたハリスの幼児教育思想は、制

度的に幼稚園と小学校との接点をつくり、幼稚園と小学校カリキュラムの接続という観点から、幼稚園のサブ・プライマリー化の出発点となったこと、進歩主義教育ほどは接続が意識されていなかったにせよ、小学校教育の準備教育として、旧来のフレール主義に基づく幼稚園教育に改良を促したということ二つの点で、先行研究によって評価されてきた、進歩主義教育に「克服された過去の教育思想」としてではなく、殊幼稚園教育においては、進歩主義幼稚園実践理論のプロトタイプを提示したという意味合いにおいて、より積極的な評価が与えられてよいだろう。

## 注

- 1 例えば次の研究があげられる。Cubberley, E. P. (1919), *Public Education in the United States* (New York, Houghton Mifflin)、Curti, M. (1959), *The Social Ideas of American Educators, with New Chapter on the Last Twenty-Five Years* (Paterson N. J. Pageant Books)、Cremin, L. A. (1961), *The Transformation of the School: Progressivism in American Education, 1876 ~ 1957* (New York, Alfred A. Knopf)、Tyack, D. B. (1974), *The one Best System: A History of American Urban Education* (Cambridge, Harvard University Press)、Ravitch, D. (2001), *Left Back, A Century of Battles Over School Reform* (New York, Simon & Schuster)。
- 2 Leidecker Kurt F. (1946), *Yankee Teacher: The Life of William Torrey Harris*, New York, The Philosophical Library.
- 3 Monroe, Paul (ed.) (1911 - 1913), *The Cyclopedia of Education, Vol.3* (New York: The Macmillan Company), p. 220.
- 4 青木薫 (1990)『ウィリアム・T・ハリスの教育経営に関する研究』風間書房。
- 5 同書、pp. 318-319.
- 6 「幾千人もの子どもたちが、所定の時間になると、たとえば十一時には地理について、ちょうどその時刻に一齐に学ぶべき同じ課題を学習している。……わが国の西部地方のある都市においても、まさにこのような自慢話が、そこをひっきりなしに訪れる参観者に対して、当地の

- 教育長によって繰り返し、いつも語られていた  
のである」(『学校と社会』第二章 学校と子ども  
の生活)とデューイが述べている当地の教育  
長はハリスを指しており、暗に彼のことを批判  
している様子が見取れる。このデューイの発  
言に依拠しつつ、デューイと進歩主義教育に  
対して好意的な評価をする研究者によっては、  
ハリスは否定的な評価の対象となってきた。
- 7 幼稚園教育におけるフレーベル主義保守派と進  
歩主義との対立は、19人委員会の論争、とりわ  
けブrouとヒルとの間の論争にフォーカスされ  
る傾向がある。
  - 8 Harris, W. T. (1868), "Report" of the  
Superintendent," Fourteenth Annual Report  
of Board of Directors of the St. Louis Public  
Schools, p. 81.
  - 9 Harris, W. T. (1876), Twenty-Second Annual  
Report of the Board of Directors of the Saint  
Louis Public Schools, pp. 79-80.
  - 10 Harris, W. T. (1879), "Kindergarten in the  
Public School System," American Journal of  
Education, p. 522.
  - 11 ヘーゲルは「自己意識は、自己自身を疎外する  
限りでのみ、何物かであり、その限りでのみ実  
在性をもつものである」という前提で、自己意  
識が自己の個人格を外化することによって自分  
の世界をわがものにしようとする運動と捉える  
(G・W・ヘーゲル (檜山欽四郎訳)『精神現象学  
下』平凡社、1997年、p.73-115)。ハリスはこ  
のヘーゲルの自己疎外に関し、個人の共用と個  
人自身の現実の織り成す運動として捉えている  
点に着目する。
  - 12 Harris, W. T. (1889), "The Psychology of  
Manual Training, Education, May, 1889, p. 289.
  - 13 Ibid., pp. 571-582.
  - 14 Harris, W. T. (1898), Psychologic Foundations  
of Education; an attempt to show the genesis  
of the higher faculties of the mind, New York,  
D.Appleton & Co., p. 321.
  - 15 Ibid., pp. 321-323.
  - 16 Ibid., p. 323.
  - 17 Ibid., p. 317.
  - 18 Ibid., p. 317.
  - 19 Harris, W. T. , "Kindergarten in the Public  
School System," op. cit., p. 522.
  - 20 Harris, W. T. (1878), "Kindergarten," in  
Twenty Third Annual Report of the Board of  
Directors of the St. Louis Public Schools, for  
the year ending August 1, 1877, St. Louis, John  
J. Daly & Co., p. 212.
  - 21 Fisher, L. (1903), The Kindergarten, Report  
of the Commissioner, pp. 701-702.
  - 22 上野辰美 (1995)『アメリカ幼稚園教育の公教育  
性発展過程に関する研究』風間書房、p.135.
  - 23 彼女は「偉大な教師の特徴は、示唆を与えるこ  
とであって決して命令したり規定したりするこ  
とではない。偉大な教師は、自分自身のことよ  
りも真理を愛する弟子を求める。英雄崇拜主義  
者は決して裁量の弟子を育てることはないし、  
そういう人は個人的特質とその人物の哲学とを  
混同する。彼らは偉大な教師の諸観念を最終的  
で完成されたものとして受け入れるならば、彼  
らは単に盲従的な模倣者にすぎない…」と述  
べ、フレーベル主義者たちの当時の様子に辛  
辣に批判を浴びせた (Bryan, E. A. (1890), "  
The Letter Killth," Journal of Proceedings and  
Addresses of the N.E.A., p. 573.)。
  - 24 Dewey, J. (1899), The School and Society,  
Chicago : Illinois, University of Chicago Press,  
pp. 118-119.
  - 25 この論争の発端は、1898年の同連盟総会で、  
保守主義者と進歩主義者の考え方の相違と対立  
が明確になったことによる。この論争を収める  
ために、1903年に15人委員会(その後19人  
になる)が設置され、1913年に「国際幼稚園  
連盟19人委員会」(International Kindergarten  
Union, Committee of Nineteen)名で"Report of  
the Committee of Nineteen on the Theory and  
Practice of the Kindergarten"を出した。実際  
には論争の解消にはならず、保守派と進歩派が  
それぞれ別々に報告書をまとめ、それに中道派  
のハリソン (Elizabeth Harrison) が数ページ  
加筆したものを合わせた形で提出された。
  - 26 Harris, W. T., "The Pedagogical Creed of  
William T. Harris," in Educational Creeds of  
Nineteenth Century, ed. Ossian H. Lang (New  
York: Kellogg, 1898), p. 37.
  - 27 Harris, W. T. (1902), "How the School

Strengthens the Individuality of the Pupils,”  
National Educational Association Proceedings,  
pp. 118-125.

- 28 Ibid.
- 29 この著作の第一部「心理学的方法」(Psychologic Method) は、1889年に『教育心理学に関する思想』(Thoughts on Educational Psychology) として発表されており、これに第二部「心理学的体系」(Psychologic System)、第三部「心理学的基礎」(Psychologic Foundation) を加筆する形で1898年に出版された。
- 30 Rosenkranz, J. K. F. (edited by Harris, W. T.) (1899), *The Philosophy of education*, New York, D. Appleton & Co..
- 31 Harris, W. T., *Psychologic Foundations of Education*, op.cit., pp. 2-5.
- 32 『教育の心理学的基礎』出版時、デューイら新心理学を支持する研究者からの批判はもちろんのこと、セントルイス・ヘーゲル主義の仲間であるシュナイダーからも、この著作の出版が影響力をもつには20年遅かったという評価であった。(Kinzer, J. R. (1940), *A Study of the Educational Philosophy of William Torrey Harris:with Reference to the Education of Teachers*, Nashville, Tenn, George Peabody College for Techers, p. 47.)

【付記】 本稿はJSPS科研費(22K13628)の助成を受けた研究の成果の一部である。

## Early Childhood Thoughts of William T. Harris; Origin of connection between kindergarten and elementary school in the American kindergarten movement

TAKASHI YAMAMOTO \*

*\*Okayama Prefectural University*

William T. Harris (1835-1909), the subject of this article, has been positioned as an outstanding educational administrator in the history of American education. He was also a philosopher and a central figure in the St. Louis Hegel movement. By focusing on early childhood education, this article describes the significance of Harris' educational philosophy as a conceptual "bridge".

From the perspective of connecting kindergarten and elementary school curriculum, his thought on early childhood education served as the starting point for sub-primary school, and as preparatory education for elementary school education, he urged improvements to kindergarten education based on the old Froebelism principle. In two respects, we can give a more positive evaluation for his contribution to a prototype of a progressive kindergarten.

**Keywords :** William T. Harris, American Kindergarten Movement, Progressive Education, Froebelism, Unified Kindergarten and First-Grade Teaching